

Sumitomo Foundation News Vol.3

マイナス金利下でのプラス思考を

「この年次報告書は、住友財団としてはじめてのものであり(中略)この年、助成件数は、総件数で122件、助成の総額は3億円余に達しました。21世紀になると、助成の総額は約10億円になることが予想されます」

これは、年次報告書第1号にある当時財団の会長の故永井道雄氏(元文部大臣)の緒言です。残念ながらその後金利環境は悪化、最近ではマイナス金利まで登場する事態となっています。

しかし、こうした環境下にあって、住友グループ各社からは財団の活動に対し変わらぬ深い理解が示され、社会に貢献しようというグループの矜持は、多大な支援となって財団の活動を支えています。

財団もまた、マイナス(金利環境)をプラスに変えるポジティブな思考が求められています。



主な活動内容(2019年1月~4月)

* (詳細紹介)

- * 1. 1月、文化財維持・修復事業 選考委員会開催
- 2. 2月、日本関連研究助成 選考委員会開催
- * 3. 3月、第41回理事会開催
- 4. 3月、国内文化財助成 展覧会 (2019年9月~12月開催) 記者発表会
4ヵ所の会場：泉屋博古館(京都)、泉屋博古館分館(東京)
九州国立博物館、東京国立博物館
- 5. 3月、MIHO美術館内覧(滋賀県)

文化財維持・修復事業助成

～ 2018年度「文化財維持・修復事業助成」助成先決定 ～

2018年度は、120件の応募があり、その中から39件(助成金額約6,800万円)が採択されました。応募は複数年に亘る継続案件が19件、残り101件が新規案件でした。もっとも新規の内6割は過去、複数回申請のあった案件です。

申請者の約6割は寺社等の関係者で、地域別では京都府が全体の1/4を占めています。対象である美術工芸品の種類別では、掛け軸、屏風等絵画が4割、仏像等彫刻が3割となっています。

採択された案件でみると、継続案件が19件、新規案件が20件、地域別では京都が約4割と、応募全体よりその割合は高くなっています。なお、採択されたものの国宝を含む重要文化財の割合は5割となりました。

《助成対象となった文化財からのトピックス》

琉球国(現沖縄県)の王家に伝わる文化遺産(国宝)



＜那覇市歴史博物館保管 琉球国王尚家関係資料＞

海北友雪の手になる89面の障壁画の一部



＜麟祥院本堂障壁画(海北友雪筆)＞

平安時代後期の特徴を表す着甲・忿怒相

加賀藩に伝わる工芸資料の集大成



＜前田育徳会(東京都)所蔵 ひかくこうひしろう 百工比照＞



＜神護寺(山口県)所蔵 木造毘沙門天立像＞

伊東マンショの幼名の唯一の物証



＜法華嶽薬師寺(宮崎県)墨書天井画＞

理事会開催

スライドを用いて説明

3月4日(月)、第41回理事会を開催しました。スライドを用いた活発な討議を経て、以下の議案が決裁されました。

- ・2018年度「文化財維持・修復事業助成(国内、海外)」助成先
- ・2018年度「アジア諸国における日本関連研究助成」助成先
- ・2019年度 収支予算及び事業計画、他

なお、次回理事会、定時評議員会は6月に開催予定です。



海外の文化財維持・修復事業について

【助成の背景】

文化財は「こころの豊かさ」を育む源であり、新たな文化を創造する礎です。文化財を守り次の世代に伝えることは、今を生きる私たちの責務です。

住友財団の評議員・選考委員を長く務めていただいた、故平山郁夫先生は、生前「文化財赤十字構想」(国家・政治・思想・宗教等の違いを乗り越え、人類共通の財産である文化財を守ることで、世界平和の維持に寄与するという考え方)を提唱されていました。

このプログラムは、先生のこのお考えに大いに共鳴し、文化財の維持・修復に必要な資金を助成することで、修復事業を通じて伝統的修復技術の海外移転や現地の人材育成に寄与し、さらには、国際交流、国際的な相互理解に貢献することを目的としています。

【過去の採択事例】



【世界遺産】(2017年登録)
サンボア・プレイ・クック遺跡群(カンボジア)



英一蝶筆「仏涅槃図」
ボストン美術館
(アメリカ)
(フリーア美術館との
共同修復事業)

～ 2018年度「海外の文化財維持・修復事業助成」助成先決定 ～

20カ国(文化財の所在では26カ国)から45件の応募があり、18件、3,500万円余の助成を決定しました。

採択案件では、文化財所在国に関してはアメリカが7件と最多で、アジア5件、ヨーロッパ4件、中東1件、アフリカ1件となり、全体では12ヶ国に広く分散しました。文化財の区分では、流出文化財が10件(内、絵画9件、工芸品1件)、遺跡7件、書跡が1件でした。

中でも、カンボジアのサンボア・プレイ・クック遺跡は1997年以来22年間助成を継続し、一昨年にはユネスコの世界遺産に登録されました。遺跡関係は発掘・保存に時間がかかる為、息の長い助成が必要とされています。



文化財維持・修復事業

～ 文化財の修復の基礎 第1回「絵画の修復」～

住友財団は国内外の文化財修復事業に対し助成を行っています。ここでは、文化財の修復を理解していただくために、これから数回のシリーズに亘って、修復の基礎的な事柄を分かり易く解説させていただきたいと思えます。

第1回は日本の伝統的な絵画(掛け軸、屏風、巻物等)の修復についてです。

【日本の伝統的絵画の特質と修復】

日本の伝統的絵画は紙や絹といった繊細な素材に天然の絵の具等で描かれており、その保存・鑑賞の形式は、掛け軸や屏風、巻物などの形態がとられています。

このため、時の経過と共にシミや汚れ、折れや裂け目、また絵の具の剥落や変色等が生じます。とりわけ、わが国の高湿多湿の環境はこうした「経年劣化のリスク」を加速すると共に、地震・風水害・火災等の「自然災害リスク」、更には取り扱いの不備や故意の破損による「人為的リスク」もあって、常に脆弱な状況におかれています。

こうした紙や絹に描かれた日本の絵画の最も重要な修復方法のひとつが「裏打ち(うらうち)」と呼ばれるものです。これは本紙の裏から紙(和紙)を接着し、補強し形を整えるものです。

【絵画の修復 裏打ち】

裏打ちは、3つ若しくは4つの工程(取り替え補強)からなります。



肌裏打ち

「肌裏(はだうら)」

本紙を直接補強するもので、次の修理までしっかり接着固定するとともに将来の修理の際に本紙を傷めることなく取り外すことを目的とします。

補強には強靱でしらか均質な薄い和紙「美濃紙(みのがみ)」が用いられ、接着には次の修理の際に容易に取り外せるよう、小麦澱粉糊が用いられます。



クリーニング



裏打紙除去

「増裏(ましうら)」

ここでは作品を柔軟に仕立て、本紙にかかる様々な圧力を吸収するやわらかさ、反発力のある「美栖紙(みすがみ)」が用いられます。糊は小麦澱粉糊を5年から10年寝かせた「古糊」が用いられます。

これは接着性や粘度は低いものの、やわらかな風合いを出すことが出来るとされています。また増裏には「打ち刷毛」という独特の接着工法が用いられます。これは刷毛を立てて強く打ち込む技法で、紙を構成する繊維が圧着され入り組むことで接着効果があると言われています。

また、少ない糊でしっかり接着し、紙をやわらかく仕上げる効果があるとされています。



打ち刷毛



総裏打ち

「総裏(そううら)」

掛け軸においては強靱でなめらかな仕上がりが求められ、紙には粘土(白土はくど)の入った「宇陀紙(うだがみ)」が用いられます。

古糊や打ち刷毛を用いる点は増裏と同様です。なお、補強を増すために増裏の後に中裏(なかうら)を行う場合もあります。